

思考を活性化させる

授業デザイン

ツールとしてのアクティブ・ラーニング

高大接続改革においても、その充実が求められているアクティブ・ラーニング（以下、AL）。

ただ、ALという言葉自体は浸透してきているが、その捉え方や考え方は様々であり、

現場での共通認識はなかなか進んでいないというのが現状のようだ。

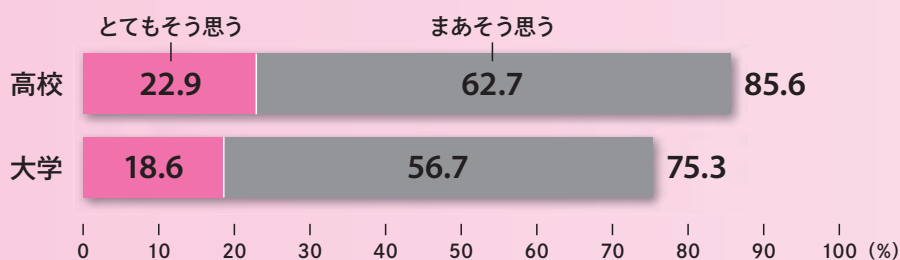
そのため、ALを授業に取り入れることに疑問や不安を抱き、二の足を踏んでいる教師も少なくない。

そこで今号では、現場の声からALについての現状や課題を把握しつつ、AL実践者への

ヒアリングと取材を通して、ALを取り入れたこれからの授業デザインのあり方について考えていく。

Q.

高校でディスカッションやグループワークなど、講義以外の授業方法をもっと取り入れた方がよいと思いますか。



注) 対象は、全国の高等学校の校長及び大学の学科長。2013年11月～12月に郵送法による質問紙調査を実施。有効回答数は、高校1228、大学2012
出典/ベネッセ教育総合研究所「高大接続に関する調査」(2014)

本号のテーマ

これからの授業デザインのあり方とは？

教育改革や高校現場の課題解決のために求められている授業改善の目的

学力の3要素(知識・技能、思考力・判断力・表現力、主体性・多様性・協働性)を身に付けさせ、主体的な学習者を育成すること

そのための方策の1つとして、受け身の学習だけではなく、主体的・協働的に学ぶ学習=アクティブ・ラーニング(以下、AL)の充実が求められている

1 これからの授業デザインのポイント

提言と実践【P.6～19】

今号での取材や現場へのヒアリングを基にした編集部によるまとめ

- ◎高校教育におけるALの最も重要な目的は「生徒個々の思考の活性化・深化」。他者との協働的な活動は、思考をより深いものにするためには不可欠な要素であるが、それ自体が目的ではない。
- ◎思考の活性化・深化は、他者との協働的な活動(言わば「動」の学習)と、生徒個々の熟考や内省(言わば「静」の学習)を有機的に組み合わせる、教師の授業デザインによって実現する。
- ◎思考を活性化・深化させる授業デザインでは、ALは生徒の状況によって最適と考えられるタイミングで選択される。つまり、「ALありき」ではないが、分野・単元の深い理解にはALは不可欠である。

実践事例
1

国語【P.10～13】

『山月記』を題材に「生きることの意味」を考える

三重県立桑名北高校 石田実貴

実践事例
2

数学【P.14～16】

グループでの問題演習を中心に据え、活用できる知識を獲得させる

三重県・私立鈴鹿中学・高校 岩佐純巨

実践事例
3

生物【P.17～19】

知識の習得よりも思考のプロセスを重視する授業

群馬県立中央中等教育学校 松井孝夫



2 組織全体への普及を実現するために

ドキュメント

長野県屋代高校・附属中学校【P.20～23】

生徒を学びに向かわせるため、私たちは「AL」を選んだ

大学の
取り組みアクティブ・ラーニングで
教育の実質化と大学の国際化を推進【P.24～25】

名古屋大 総長補佐(国際化推進担当) 土井康裕

